一緘黙児の治療的変化(2)

― ロールシャッハ・テストを通して ―

Therapeutic Change of Mutism(2)

安　田　　勉
Tsutomu Yasuda

1. 問題および目的

前論[1]では、緘黙児の治療的変化を行動に基づいて分析し、考察した。その結果、次のようなことが明らかになった。(1)発語対象の増加、会話量の増加には、それに先だって行動の活発化が見られた。したがって緘黙児の治療に当っては、活動性を増すような取組み、とりわけ共同行動による共感性、肯定的自己イメージの形成が重要になる。(2)発語対象の増加、会話量の増加にともなって、過剰行動、過剰言語が見られる。状況にあった会話行動を形成するために、また自己評価を高める上からもこのことが必要であり、出現を保障する必要がある。(3)過剰行動と過剰言語との関係では、過剰行動が先に出現し、過剰言語を促し、過剰行動の消退、行動の安定化の後に過剰言語が消退する。(4)緘黙状況からの回復には家庭、学校（教師）、施設間の協力・支援体制が重要な役割を果たす。

同一緘黙児に対しては治療的変化を知る一つの方法としてロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テストと略す）を行っている。本論ではロ・テストの結果を報告、考察し、更に行動との関係、治療的取組みについて考察したい。

2. 方法

ロ・テストの施行および分析法はJ.E.Exner,Jr.（1974、1978、1982）のComprehensive systemに従い、構造分析を中心に行った。ロ・テストの施行は4カ月から8カ月の間隔で5回行った。施行時の年齢は次の通りである。第1回（11歳5カ月）、第2回（11歳11カ月）、第3回（12歳4カ月）、第4回（13歳0カ月）、第5回（13歳4カ月）。

3. ロ・テストの結果および考察

(1) ロ・テストについて

第1回のロ・テストの結果はTable 1の通りである。R＝12, Lambda＝11、Afr＝0.33、H＝0で感情抑圧が強く、対人刺激を避けている様子がうかがえる。A%＝1.00から防衛的であることが考えられる。X＋%＝0.7、F＋%＝0.75で、現実検討力はあると考えられる。

人との距離をとり、状況を客観的に見ている様子がうかがえる。

Table 1　Structural Summary (1)

R＝12,Zf＝0,ZSum＝0,P＝2,(2)＝2,D＝8,Dd＝4
[Dterminants]FC'＝1,F＝11
[Contents]A＝7,(A)＝1,Ad＝4
……
EB＝0:0,EA＝0,eb＝0:1,ep＝1,a:p＝0:0,Ma:Mp＝0:0
FC:CF＋C＝0:0,W:M＝0:0,W:D＝0:8,L＝11,F＋%＝0.73
L＝11,F＋%＝0.73,X＋%＝0.75,A%＝1.00、Afr＝0.33
3r＋(2)／R＝0.17,Cont:R＝1:12,H＋Hd:A＋Ad＝0:1
H＋A:Hd＋Ad＝7:4,XRT Achrom＝42.25,XRT Chrom＝41.67

第2回のロ・テストの結果はTable 2の通りである。Zd＝3でやや早のみこみをしがちである。EB＝1:0.5から問題の処理パターンは自分で考えながら問題を解決していくタイプである。F＋%＝0.67, X＋%＝0.69で、現実検討力はやや低い。A%＝0.69で、まだ防衛的である。しかし、M反応やHdが現われ、対人への興味が見られ、さらにFC:CF＋C＝1:0, L＝0.53, Afr＝0.71で、対人刺激を避けておらず、どちらかといえば刺激に巻き込まれやすい。m＝4から状況ストレスを感じていることが考えられ、またFC'＝10から、他者に合わせることで自分の感情を抑圧していることの苦痛が考えられる。Ma:Mp＝1:0, a:p＝5:2で、外からの刺激を積極的に受け止めようとしており、実際そうしていることがうかがえる。3r＋(2)／R＝0.19, W:M＝4:1で、自己評価が低く、目標設定が高すぎる。

以上の結果から、積極的に人と関わろうとしており、それが人に翻弄される結果となり、苦痛に感じていることがうかがえる。

第3回のロ・テストの結果はTable 3の通りである。EB＝3:0で問題の処理パターンは前回と同様である。FC'＝5から感情を抑圧していることの苦痛が考えられる。M＝3から、さらに人間への興味が増していることが考えられるし、Cont:R＝3:24から人間関係が良くなっていることが考えられる。F＋%＝0.5, X＋%＝0.63で、現実検討力はやや低い。A%＝0.54で防衛はややとれて

Table 2　Strucural Summary (2)

R=26,Zf=5,ZSum=10.5,P=4,(2)=5,W=4,D=15
Dd=7,S=2
[Dterminants]FM^{p}.FC.FC'=1,M=1,FM=1,m=4
FC'=10,F=9
[Contents](H)=1,Hd=4,(Hd)=3,A=9,(A)=1,Ad=8
……
ZSum-Zest=10.5-13.5,Zd=-3.0,EB=1:0.5,EA=1.5
eb=6:10,ep=16
Blends:R=1:26,a:p=5:2,Ma:Mp=1:0,FC:CF+C=1:0
W:M=4:1,W:D=4:15,L=0.53,F+%=0.67,X+%=0.69
A%=0.69
Afr=0.71,3r+(2)／R=0.19,Cont:R=2:26
H+Hd:A+Ad=4:17,H+A:Hd+Ad=9:13
XRT Achrom=29.4,XRT Chrom=16.6

きている。L=1.0，Afr=0.5でやや対人刺激を避ける傾向がある。しかし、Ma:Mp=2:1で刺激を積極的に受け止めようとしている。3r+(2)／R=0.04で自己評価は低い。W:M=2:3から今回は設定目標が低くなりすぎている。

今回の状態としては、人間への興味は増しているが、まだ対人刺激を避けがちである。現実検討力が低い形で目標を下げているが、自己評価は低い。

第4回のロ・テストはTable 4の通りである。EB=1:2から、問題処理パターンは人と相談しながら問題を解決していくタイプである。FC'=2で感情の抑圧による苦痛が考えられる。Hd=5，Cont:R=5:20から、対人興味があり対人関係がさらに良くなっていることが考えられる。F+%=0.6，X+%=0.65で現実検討力はやや低く、A%=0.6で防衛がやや高まっている。FC:CF+C=0:2で感情のコントロールができない可能性がある。L=1.0，Afr=0.54で、感情の抑圧、対人刺激をやや避けていることが考えられる。しかし、Ma:Mp=1:0，a:p=2:2から外界からの刺激を積極的に受け止めようとしていることが考えられる。3r+(2)／R=0.05で自己評価は低い。W:M=1:1から設定目標が低いと考えられる。

Table 3　Strucural Summary (3)

R=24,Zf=4,ZSum=12.0,P=3,(2)=1,W=2,D=13
Dd=9,S=3
[Dterminants]M=3,FM=2,FC'=5,FV=1,FD=1,F=1
[Contents]H=1,(H)=1,Hd=5,(Hd)=3,A=5,(A)=1
Ad=5,(Ad)=2,Na=1
……
ZSum-Zest=12.0-10.0,Zd=2.0,EB=3:0,EA=3
eb=2:6,ep=8
Blends:R=0:24,a:p=4:1,Ma:Mp=2:1,FC:CF+C=0:0
W:H=2:3,W:D=2:13,L=1.0,F+%=0.5,X+%=0.63
A%=0.54
Afr=0.5,3r+(2)／R=0.04,Cont:R=3:24
H+Hd:A+Ad=6:10,H+A:Hd+Ad=6:10
XRT Achrom=18.8,XRT Chrom=18.6

Table 4　Strucural Summary (4)

R=20,Zf=1,ZSum=3.5.P=1,(2)=1,W=1,D=13,
Dd=6,S=2
[Dterminants]M=1,FM=1,m=2,CF=2,FC'=2,FT=1
FD=1,F=10
[Contents]Hd=5,A=4,(A)=1,Ad=6,(Ad)=1,Cg=1
Fd=1,Rocket=1
……
EB=1:2,EA=3,eb=3:3,ep=6,Blends:R=0:20
a:p=2:2,Ma:Mp=1:0,FC:CF+C=0:2,W:M=1:1
W:D=1:14
L=1,F+%=0.6,X+%=0.65,A%=0.6
Afr=0.54,3r+(2)／R=0.05,Cont:R=5:20
H+Hd:A+Ad=5:10,H+A:Hd+Ad=4:11
XRT Achrom=26.4,XRT Chrom=25.4

第5回のロ・テストはTable 5の通りである。Zd=-9からかなりの早飲み込み状態であることが考えられる。EB=6：0から、問題処理パターンは自分で考えて問題を解決していくタイプである。FC'=3で、感情を抑圧していることによる苦痛が考えられる。F+%=0.63，X+%=0.5で現実検討力は低い。今回だけ F+%>X+%になっている。これは一人で考える時のほうが現実検討力が増すことを物語っている。A%=0.56でやや防衛的である。FC:CF+C=1:0，L=1.46，Afr=0.78で感情を抑圧しているが、対人刺激を避けようとはしていないことが考えられる。そのことは、Ma:Mp=4:2，a:p=4:3からも考えられる。3r+(2)／R=0.03で、自己評価は低い。W:M=3:6で設定目標は能力以上に低い。第3回以降、目標の低さが目立つ。

次に、各回のロールシャッハ反応を分析指標に沿って見ていきたい。まず基本的心理構造指標では、EBは第4回を除き、変わっていない。状況に左右されるものの、本児の問題処理パターンは自分で考えながら問題を解決していくタイプと言える。EAは回を経るごとに数値が

アップし、心理的資源が増大していることがうかがえる。ebではC'系が多いことから感情を抑圧していることによる苦痛があると考えられる。

感情抑圧度指標では、第2回以降は、R=20以上、Lambda=1前後とやや高いものの、抑圧がとれてきていることがうかがえる。しかし、C反応が少なく十分とは言えない（Weighted Cは11歳：M=3.42、SD=1.84、12歳：M=4.31、SD=2.11、13歳：M=4.02、SD=1.78）[2]。

Table 5　Strucural Summary (5)

R=32,Zf=8,ZSum=33.5,p=2,(2)=1,W=3,D=14
Dd=15,S=5
[Dterminants]M*.FC'.FC=1,M=5,FM=1,FC'=3
FT=1,FV=1,FD=1,F=19
[Contents]H=1,(H)=2,Hd=9,(Hd)=2,A=7,(A)=1
Ad=9,(Ad)=1
.....
ZSum-Zest=33.5-24.0,Zd=-9.0,EB=6:0.5,EA=6.5
eb=1:6,ep=7
Blends:R=1:32,a:p=4:3,Ma:Mp=4:2,FC:CF+C=1:0
W:M=3:6,W:D=3:14,L=1.46,F+%=0.63,X+%=0.5
A%=0.56
Afr=0.78,3r+(2)／R=0.03,Cont:R=2:32
H+Hd:A+Ad=10:16,H+A:Hd+Ad=8:18
XRT Achrom=4.4,XRT Chrom=7.0

対人関係指標では、第2回以降、M反応、Hが見られるようになり、特にHdの増加が目立つ。Mの増加については、園田、福島ら（1969[3]）、流王（1971[4]）とも一致する。緘黙の改善には対人への興味が必要となって来よう。また、Afrも第2回以降、0.5以上と感情刺激をそれほど避けておらず人との関係を持とうとしていることがうかがえる。

自己評価指標は他の指標に比べて改善が見られない。第1回から0.2以下で、第3回以降さらに低くなっている。設定目標との関係では、第3回以降W:Hが変化し、設定目標を下げていることがうかがえる。以上のことから、設定目標を下げることが相対的に自己評価を上げることにはなっていないことが考えられる。自己評価は他の指標とは必ずしも連動せず、固有の取組が必要と考えられる。

現実検討力指標は第1回が最も高くその後はやや低くなっている。Afrの増加、常にMa>Mpであることとの関係で考えて見ると、対人刺激をそれほど避けていないにもかかわらず、現実検討力が低下するのは、うまく対人関係距離がとれないことが関係しているのではないかと考えられる。その現われが過剰行動であったり過剰言語ではないかと考えられる。

以上のことから、Rの増加、H+Hdの増加、M反応の増加、C反応の増加、Lambdaの減少が緘黙状態の解消に大きく寄与することが考えられる。さらに、3r+(2)／Rの増加を促すことが緘黙状態の解消をより確実なものにすると考えられる。

Tab.6　Summaray of Rorschach Responses

指　標	変　数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
基本的心理構造指標	EB	0:0	1:0.5	3:0	1:2	6:0.5
	EA	0	1.5	3	3	6.5*
	eb	0:0	6:10	2:6	3:3	1:6
	es	0	16	8*	6*	7*
感情抑圧度指標	R	12	26	24*	20*	32
	FC:CF+C	0:0	1:0	0:0	0:2	1:0
	Lambda	11	0.53	1*	1	1.46
対人関係指標	Afr	0.33	0.71*	0.5	0.54	0.78*
	Pure H	0	0	1	0	1
	M	0	1	3*	1	5
自己評価指標	3r+(2)/R	0.17	0.19	0.04	0.05	0.03
現実検討力指標	X+%	0.75*	0.69	0.625	0.65	0.5
	F+%	0.73	0.67	0.5	0.6	0.63

* J.E.Exner,Jr（1982）の標準化による正常群のM−1∑からM＋1∑の範囲にあることを示す。
（比率は除く）

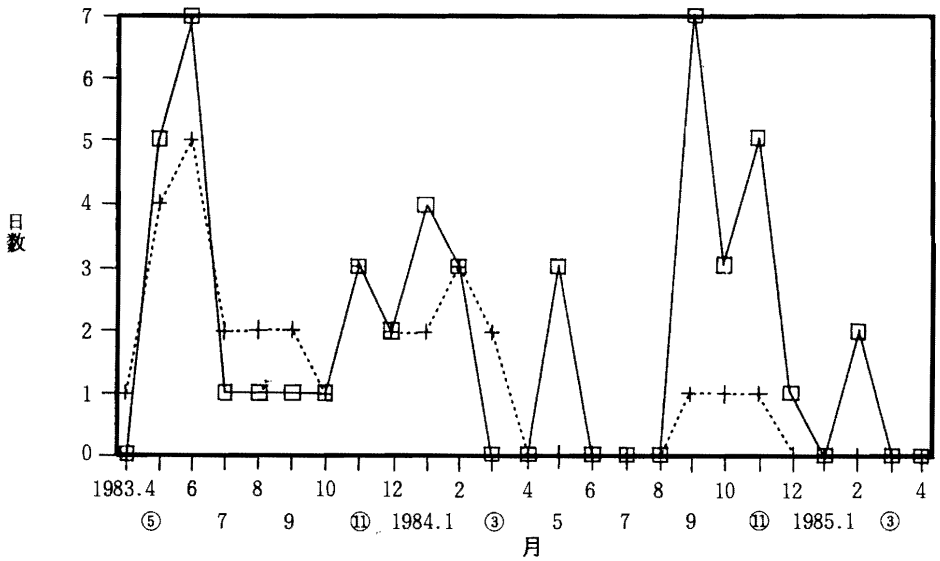
(2)　ロ・テストと行動

ロ・テスト施行時の施設での生活の様子は以下のようである。第1回は入所後1カ月であり、職員や他児と挨拶ができたり、一人ではしゃいだり、踊ったり等の過剰行動が見られたが、学校では、話せない、他児と一緒に食べれないという状況であった。第2回は、学校内で友達と一緒にいる時間が増え、年下の子供に話すという変化が見られてきた時期である。第3回は、施設内での安定した会話、学校内での教師および友達との会話が可能になった時期である。第4回は、施設内では、行動の落ち着きは見られるが、言語面において、言葉の荒さ、多弁等の過剰言語が見られ、また学校内では、少ないけれども会話が見られた。第5回は、退所1カ月前で、施設内での安定した行動、会話が見られた時期である。

尚、ロ・テスト施行月における過剰行動日数および過剰言語日数はTable 7、ロ・テスト施行時と過剰行動および過剰言語の関係はFigure 1の通りである。

Table 7　Frequencies of Overbehevior And Overspeech In Rorschach Testing Month

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
過剰行動	4	3	2	1	0
過剰言語	5	3	0	5	0



□過剰言語＋過剰行動

○はロールシャッハ・テスト施行月

Figure 1　Frequencies of Overbehavior And Overspeech, And Rorschach Testing Month

4. まとめ

一緘黙児に対して治療的変化を見る方法の一つとしてロールシャッハ・テストを継時的に行った。その結果、次のようなことが明らかになった。

(1)　Rの増加、Lambdaの減少と共にM反応、H+Hd、EBが増加し、対人への興味、心理的資源が増加している。しかし、Weighted Cはそれほど増えていない。

(2)　3r+(2)／Rは他の指標に比べて改善が見られない。むしろ第3回以降さらに低くなっている。心理的資源の増加、設定目標を下げることが必ずしも自己評価を高めることになっていない。自己評価は他の指標とは必ずしも連動せず、固有の取組が必要と考えられる。

(3)　F+%、X+%は第2回以降、第1回と比較して低くなっている。Afrの増加、常にMa>Mpであることとの関係で考えて見ると、対人刺激をそれほど避けていないにもかかわらず、現実検討力が低下するのは、うまく対人関係距離がとれないことが関係しているのではないかと考えられる。

従って、H+Hdの増加、M反応の増加、C反応の増加、Lambdaの減少が緘黙状態の解消に大きく寄与することが考えられる。さらに、3r+(2)／Rの増加を促すことが緘黙状態の解消をより確実なものにすると考えられる。

参考文献

1) 安田勉：一緘黙児の治療的変化 (1)－入所治療における行動分析を通して－、弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要 28、25－31、1992
2) John E.Exner, Jr.：A Rorshach Workbook For The Comprehensive System (Second Edition)、142－147、1985
3) 園田順一、福島忠：青年期まで続いた心因性無言症の一例、臨床心理学研究 8(2)、94－99、1969
4) 流王治郎：心因性無言症のロールシャッハ反応、ロールシャッハ研究 XIII、59－67、1971